

二 ヨングハンス先生——メリケン医術の伝搬

1 築地居留地のドイツ系アメリカ人教師

◆『胡蝶の夢』のドイツ語教師

ヨングハンスが本学に赴任したのは、一八七三（明治六）年五月のことですが、それまでにかれは東京築地の居留地や伊万里県で活躍しています。それも、医師としての活動だけでなく、ドイツ語も教えていました。

司馬遼太郎の大河小説『胡蝶の夢』（一九七九）には、そのころのヨングハンスが登場しています。佐渡から出てきた伊之助が、ペリー来航前の嵐のような時代のなかを、西洋語の才と西洋医学の技量を武器にして、自分の運命を切りひらいていくという物語ですが、そのなかに一八七〇（明治三）年ころ、伊之助がドイツ語の会話と読解を学ぶため、磁石の鉄片が吸いよせられてゆくように、

「ひまをみつけては東京の築地の居留地に住むドイツ系米人の医師のヨングハンという者

の家に通った」

という、くだりがあります。当時の『人名要覧・商館名簿 (Japan Herald Directory and Hong List, 1872)』などによると、この医師こそT・H・ヨングハンスと考えられます。東京・小川町にあったドイツ語塾・竜門義塾の、山縣信というドイツ学教師も、この「築地居ヨングハーン氏に随学」していたという、確かな記録があります。

◆大学東校の医学教師候補

大学東校（東京大学医学部の前身）の医学教師の候補にあがったのも、このころのことでした。政府は一八六九（明治二）年からドイツ医学を採用する方針を決め、翌年二月に、ドイツ人医学教師のL・B・C・ミュルレルならびにT・E・ホフマンと雇用契約を結んだものの、折からの普仏戦争で軍医が不足とあって、かれらはなかなかやってきませんでした。急場しのぎで臨時に雇ったオランダ人教師A・F・ボードインも帰国してしまい、ひどく焦っていたころ、その名が聞こえていたヨングハンスを、しばらく採用しようとしたものです。このときの仲介者が、先の小説『胡蝶の夢』の伊之助、すなわち司馬凌海（一八三九—一八七九）でありました。

ただし、この話は残念ながら実現をみませんでした。その際のおもしろいきさつが、石黒

一 同廿三日朝御通シナシ御食檢前日ニ比スレハ僅ニ可ナリ夜中大ニ凡氣ヲ泄ス	一 同廿四日朝御大便ナシ御食餅ナシ宜ニ築地	馬量海御附方左ノ如シ	芦薈越幾私 番米蠶越幾斯	右ニ味各四分ノ一ヲ一九トス日ニ三九御食後ニ用	御舍漱棄 明菴 没藥丁幾ヒン子丁幾	朝夕糞粉ノ御洗腸	鵜二十支壯丹錠一 晝三字此	正四位様御着京	一 同十七日十二字御大便 <small>甚布狀</small> 一字御粥二十	七支夜六字半御粥十支御雜炊十一支壯筋汁	一 梳膏ヨリ微御發熱御手足或時温或時冷御精神恍惚トシ明ララス御脈微弱僅ニ指下ニ應スルノミ	晝三字比普醫沃武 <small>武</small> 奉祀司馬量海拜診ニ差	エリキシルヲ力カリサテカイイマイ <small>イ</small>	及トリキヒシト譯系黃幾那兼鉄番米蠶愈約
--------------------------------------	-----------------------	------------	--------------	------------------------	-------------------	----------	---------------	---------	--	---------------------	--	--------------------------------------	-----------------------------------	---------------------

此御食檢實案ニ御向入ス

ヨングハンスによる鍋島直正公診察記録
〔『診察御日記』大阪市史編纂所中野操文庫蔵〕

忠憲『懐旧九十年』（一九八三）などに記されています。

◆鍋島直正公の診察

旧佐賀藩主・鍋島直正（閑臈）の診療にあたったのも、この築地居留時代のことでした。東京にいた直正公は、しばしば胃腸疾患に苦しみ、嘔吐や下痢に悩んでいました。大典医の伊東玄伯やお雇い教師のボードインにつづいて、ヨングハンスが往診することになりました。直正公の主治医・竹内玄庵や伊東大典医が、築地の名医として知られていたヨングハンスを推薦したのでした。ヨングハンスの往診は、一八七〇（明治三）年一二月二四日にはじまり、死去する前日の一八

七一（明治四）年一月一七日まで、八回にのぼっています。その都度、通訳として司馬凌海が同行したようです。

開国以来、多数の外国人が来日しましたが、かれらは各国公使館員であるか、政府あるいは各地の官庁、学校、病院、会社などに雇われていないかぎり、居留地外での居住や営業は認められていませんでした。ヨングハンスは、まだどこからもお雇いの口がかからないのですから、築地居留地内でドイツ語および医学の知識と技量をもとに活動していたのでした。

2 医学講習場のお雇い医学教師

◆伊万里県立好生館病院のお雇い教師

明治のはじめ、洋学を身につけた実学人材を養成するため、いつせいに各種の専門教育機関が創設されはじめました。官立だけでなく、公立や私立の専門学校も誕生しましたが、当初、その編制や教授の仕事は外国人教師に頼るしかありませんでした。

医学の教育においても、各地で擬洋風建築の学校や病院が建てられ、外国人教師が競って招かれました。愛知県でも、一八七三（明治六）年三月、県の権大属である種瀬千里、病院幹事代表の永井松右衛門らが、外国人教師や訳官を求めて東京や横浜などへ出張し、「アメリカ公

館の幹旋」で雇い入れたのがヨングハンスでした。当時、四一歳か四二歳で、横浜の居留地に住んでいました。永井松右衛門とは小説家・永井荷風（一八七九—一九五九）の叔父にあたります。

横浜居留地にいたといっても、ヨングハンスにとって愛知県雇いがはじめてのお雇い教師ではありませんでした。直正公とのつながりが機縁となったのか、すでに一八七二（明治五）年三月一日から一年間の契約で、伊万里県（今の佐賀県）の県立好生館病院に招かれていたのですが、満期となり横浜に引きあげてきていたのです。

◆ヨングハンスの雇用契約

ヨングハンスが愛知県と結んだ雇用契約は、一八七三（明治六）年五月一日からむこう三年間、給料は一か月四〇〇ドル、これを毎月二〇日の横浜洋銀相場で月末に支払うというものでした。洋銀（メキシコ・ドル）で契約したのは、明治初期には、まだ貨幣の品位が一定せず、国内通貨は正貨に対して信用がなかったためです。これに、横浜・名古屋間の往復の旅費としてそれぞれ四八円を支給し、加えて住宅一棟を無料貸与する、というから相当の厚遇ぶりです。年一五日間の暑中休暇も与えられましたが、在職中に商売の筋に関係することは厳禁、という条件がついていました。



ヨングハンスの契約状（『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』所収）

◆愛知県仮病院の開設

ヨングハンスとの契約に成功するころ、名古屋門前町の西本願寺別院内に、待望の病院が開設されました。ヨングハンス以下、副教師の足立盛至や訳官、当直医、薬局医、病室係、器械係、病院幹事など、総勢三四名の教職員をもつて、陣容が整えられました。

ヨングハンスが着任すると、メリケン（米利堅）医術の到来だというわけで、病院は繁盛しました。

「病院雇教師米国人ドクトルヨングハンス氏診察之儀創業以来日々入院患者相増随テ時限ニ後レ外来患者ニ於テハ数度登院スルト雖モ診察ヲ不受空シク退院ノ者不少哉ニ相聞候」（『愛知県布達類聚』明治九年五月）

という盛況ぶりでした。そこで、ヨングハンスの診療時間が指定されることになります。偶数の日には、朝九時から正午まで外来患者を診察する。残る時間を入院患者にあて、これ以外は副教師の足立盛至が担当する。奇数の日は、入院患者を先にし、

残り時間に外来患者を診察することにしたのでした。

「氏ハ有名ノ大家学術精妙言ヲ俟タズ凡病内外ヲ論セス速ニ就テ治ヲ請フ可シ慣習ノ久キ世人概子空理臆断ノ漢方ヲ信シ却テ精確実側ノ洋方ヲ疑フ愚モ亦甚シ人命至重生ヲ好シ死ヲ悪ム動物皆然リ人最モ甚トス誰カ夭折ヲ欲スル者アランヤ偕俱ニ長寿ナラン」ことヲ欲ス宜シク良医ニ附クベシ」

このような洋医ヨングハンスを喧伝する記事が、地元紙の『愛知新聞』（明治六年一〇月）に掲載されました。『愛知週報』（明治六年一〇月一九日）にも類似の文がみえます。

◆日本最初の皮膚移植手術

ヨングハンスは、なかなか非凡な医師でした。

右脚にやけどを負った患者に植皮術を施したのは、一八七四（明治七）年九月のことでした。患者は愛知郡中根村（今の名古屋市瑞穂区中根）で農業を営む伴野新左衛門。弟の新蔵がさし出した左ひじの皮膚を移植したのです。当時の『愛知県公立病院及医学校第一報告』には、

「蓋シ我邦此術ヲ行フ最モ新奇トスル所ニシテ衆医員大ニ其術ノ巧妙ナルヲ歎賞セリ」

とあります。『名古屋大学医学部百年史』（一九七七）では、「恐らく我が国始めてと思われる斬新な手術」だと位置づけられています。



ヨングハンスの植皮手術（東京大学法学部明治新聞雑誌文庫蔵）

西洋医学による治療は、当時、考えおよばぬところでした。せいせい膏薬を塗るぐらいで、やけどの処置として植皮という外科手術はまだ考えられなかつたはずです。そうした医術の先進性のほかに、弟が兄のために自分の皮膚の提供を申しでるといふ話題性をもっていましただけに、この植皮手術は世間の耳目を集めました。『官許読売新聞』四一号（明治八年一月二六日）で報じられましたし、錦絵としても描かれました。正確にいえば、『大阪錦画新聞』（二三号）という錦絵新聞です。

長谷川貞信（一八四八—一九四〇）
という大阪の浮世絵師によって絵画化

されたもので、右ひじをついて、患者の左脚を押さえつけながら手術を施している様が描かれています。患者は椅子に腰をかけ、左脚を前に投げだして踏んばっている。その脚はむくみ鮮血がしたたり落ちています。顔をそむけ、口は真一文字。痛みをこらえているのか、ひざをつかんでいる右手には力がこもっています。術者ヨングハンスもまた、目はつり上がり、メスを口にくわえて力をふり絞っている。そのメスには血がついているから、むくんだ部位を切除しおわって、両手であたらしい皮膚をまさに移植しようとしているところなのでしょう。荒い息づかいが聞こえてきそうな、とても力強い図柄です。術者は洋髪・洋服、患者は髪をつかねてへこ帯・和服姿という対比が、まことに印象的です。

もつとも、この植皮手術の予後は「決して樂觀はできない」ようでした。拒絶反応や感染症併発の危険性が大きくて、どうみても皮膚は「生着しなかつた筈である」といわれています。

◆コレラ予防の啓蒙活動

難病・奇病が発生すれば、すぐにヨングハンスの腕前が頼りにされました。一八七三（明治六）年に、「ビリビリ病」といつて、発病すれば全身がしびれ、眼は開いているけれども見えず、一日か一日半のうちに一声も出さずに死ぬという、実におそるべき奇病が名古屋一円に伝染したときも、やはりそうでした。その病源がなかなか明らかにされない現状をなげき、さら

ます。

死体解剖も公開しました。解剖所は、名古屋の下前津町榎小路に設けられていましたが、ヨングハンスは、一八七三（明治六）年一〇月以来、ここで処刑人の死体をしばしば解剖し、これを病院の医員のほか県下の開業医に公開したのでした。一種の臨床講義です。一体の解剖につき一二銭五厘の見学料を支払い、解剖の終るまで数日間有効の通し切符を手にした見学者が、押しかけました。かれらは西洋医術のメスさばきに、驚異の目を見はつたにちがいありません。このようななかから、正式の医学教育機関を設置する要望が高まり、やがて医学講習場が病院に併設されることとなります。これこそ、本学の医学部の前身校です。一八七三（明治六）年一月のことでした。このとき、二〇条からなる医学講習場仮規則が制定され、教育体制の整備がめざされました。

◆医学講習場仮規則の制定

医学講習場仮規則によると、一学年二級ずつの計四年間が修業年限と想定されました。三〇才以下の生徒には英語の原書を教科書とし、文典書・究理書・化学書・解剖書・生理書・薬剤書・内科書・外科書が用意され、それ以上の者は訳書で学ぶことを原則としました。

ヨングハンスの講義は、毎月二、四、七、九の日の午前九時より一〇時までとなっています。

○醫學講習假規則 明治七年十一月制定

第一條
 一 入學志願ノ者人其年齡ニ拘ラス差許候条左ノ雜形之通取認受人差添當日ハ時午前牙十時ニテニ病院玄関ニ差出シ可受指揮事
 但受人ハ親戚或ハ寄留所ノ戶主クル可キ事

雜形ノ之
 牙二條
 一 痘病未ク發濟セサル者ハ入學差許ス可カラ
 ノ者ハ譯者ニ頼ハシム可キ事
 但三十歳以上ノ者ト虽モ既ニ原書學ヒタル者ハ勿論有恙ノ徒ハ此限ニ非ス

牙十條
 一 教師米國スドクトルヨシカハンス氏毎月ニ七四九ノ日午前牙九時ヨリ十時ニテ講義イタクシ候事

牙十一條
 一 教師講義ノ節筆者ニ於テ其講説ヲ明詳記録シ之ヲ生徒ニ回覽セシメ候事

牙十二條
 一 醫師ハ勿論子弟ニ至ルニテ教師ノ講義聽聞致シ度輩ハ左ノ雜形ノ通取認當日午前

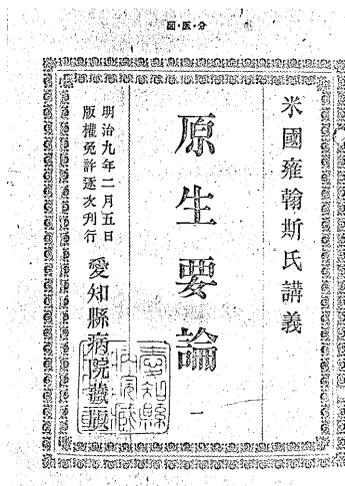
医学講習場假規則（『愛知県史料』1876年11月、所収）

「醫師ハ勿論子弟ノ徒」つまり学外者に対しても、公開されてきました。学習の便宜を考えて、「其講説ヲ明詳記録シ之ヲ生徒ニ回覽セシメ」ることになっていました。講義録が用意されたのです。けれども、「一時間の講義は通訳を介してのことでもあり、ごく一部の生徒がごく一部を断片的に理解するだけで」あつたであらうと思われれます。

◆講義録『原生要論』の刊行

ヨングハンスの講義録は、今日、一点のみ伝えられています。生徒むけではなくて、病院に在職する医員と県下の医師のために特別に開いた、生理学の講義録です。

「夫レ原生学ハ有機体^{動物}ノ常態變化ヲ論ズル所ノ者ナリ」と説きおこし、順に、血液論、



ヨングハンス著『原生要論』（名古屋大学附属図書館医学部分館蔵）

血液循環論、分泌機総論、分泌機各論へとすすみました。内容はヨーロッパの生理学説のダイジェスト版であります。この講義は訳官の鈴木宗泰が口訳し、これを病院医官の石井榮三と蜂須賀謙吉がそれぞれ筆録・校訂して、二巻本にまとめられました。

『米国雍翰斯氏講義 原生要論』

がそれです。雍翰斯とはヨングハンスの和名です。一八七六（明治九）年に刊行され、県下の開業医に頒布されましたが、二一銭五厘で市販されもしました。体内の臓器の位置や形状などの図式も挿入されていますが、これは講義のさいヨングハンスが図示したものでした。

同書は、本学の歴史上おそらく最初の学術出版物であり、しかも、成績優秀者への褒賞品として贈られたという点でも、注目されます。期末ごと

におこなわれた定期試験（口述試験）の成績上位者に「金銀書籍器械等」を贈るといふ褒賞の慣行は、一八七八（明治一一）年から始まっていますが、同書は西洋医学の翻訳書という貴重な図書であるだけに、賞品として贈られたことでしょう。

◆ 医学校設置のための世論の醸成

ヨングハンスがみせた西洋医療は清新であっただけに、人びとを魅了し見学希望者が日増しに多くなりました。これが医学講習場の設置につながったのであろうけれども、かならずしもすんなりいったわけではありませんでした。これには、興味ある裏面史があります。

実は、世評はかならずしも芳しくはありませんでした。ヨングハンスのことばがよく通じないことから、患者の信頼はえられにくかったはずで、それに、漢方医や鍼灸師らの保守派勢力からの抵抗もあいかわらず根強かったようである。

「県下人情旧習ヲ喜ヒ漢医鍼灸巫祝僧尼等ヲ信シ却テ精確実側ノ医療ヲ疑フ是ニ於テ病院盛大ノ形アレトモ誹謗亦随テ起リ噉々其虚ヲ吠ル者アル」

といった状況でした。

そこで、県当局は一策を講じました。管内の医師のなかから病院附属医を任命し、かれらと病院在職の医員とにすすめて医学校設置の建議書を出させ、これによって世論の醸成を画策し

たのです。右の引用文は、こうして任命された病院附属医のひとり中島三伯（一八二四―一八七四）の手になる、医学学校設立建議書草稿のなかの一節であります。

先に、洋医ヨングハンスにすみやかに診断をおおぐことの賢明さを喧伝した、新聞記事を紹介しましたが、実は、これも、中島三伯が西洋医学の啓蒙と病院への支援とを期して、『愛知新聞』や『愛知週報』を活用して訴えたものだったのです。このような画策が功を奏して、ようやく医学校が誕生し盛大になります。

ヨングハンスの契約は一八七六（明治九）年四月末日まででした。しかし、その前年から「重い神経炎」をわずらい職務に支障をきたすことになったため、満期前の四月七日付で解雇となりました。そのさい、愛知県は七宝焼の花瓶一對と金一五〇円を贈って、誠意ある処遇をしています。ヨングハンスと同じ三年の任期が満ちた足立盛至は、二〇円でした。

3 福沢諭吉の息子たちの後見人

ヨングハンスは、日本人アメリカ留学生との関係でも名をとどめています。一八七六（明治九）年六月二五日、パシフィック・メイルのアラスカ号で、横浜からアメリカに向かい、ニューヨーク州のポーキプシーというところに住んでいたとき、福沢諭吉の息子たちの後見人

ないし世話係であったのでした。

諭吉は、一八八三（明治一六）年以来、長男一太郎をニューヨークのコーネル大学に、次男捨次郎をボストンのマサチューセッツ工科大学にそれぞれ留学させたとき、かれらの教育・生活指導・健康管理を、ポーキプシーに住むD・B・シモンズに託していました。シモンズはかつてオランダ改革派教会から派遣されて一八五九（安政六）年に来日し、一八八二（明治一五）年にアメリカへ帰るまで、医療宣教師として横浜で開業したり、神奈川県立十全会病院に勤めたりした人物です。そのシモンズが、ふたたび来日することになったので、同じポーキプシーに住んでいた友人のヨングハンスを、自分の後任として推薦したものです。

養子の桃介の場合は、一八八七（明治二〇）年に留学したさい、ヨングハンス宅に寄寓してイーストマン・ビジネス・カレッジに通ったのでした。

一太郎、捨次郎、桃介が留学中に諭吉とやりとりした書簡やかれらの回想録のなかに、ヨングハンスのことがしばしば登場しています。ずいぶん口うるさく思われたらしく、ヨングハンスの「羈束は不本意なり」、「随分六ヶ敷事を申す」、「同人の世話は面白からず」などと諭吉に訴えています。そのころ、ヨングハンスは医院を開業し、愛知県お雇い教師時代に日本人女性とのあいだにできた子どもと一緒に住み、その子をきびしく育てていました。「非常に意志の強固な人」で、「立派な武士道を守った人」であった、ということも伝えられています。